

---

# The Chains

あめふらし3号

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The Chains

### 【Nコード】

N0022Y

### 【作者名】

あめふらし3号

### 【あらすじ】

……またかよ、アイツ。前回から日があんまり経ってないっていうのに。俺は胸の内でごっそりと溜息をついた。 脱走を

繰り返すアイツに、追いかける俺。幾度となく繰り返される日常のその裏側を、俺は本当はよく分かっている。主人公から見た友人と、国王、王妃との関係。主人公をも含んだ複雑な関係の行きつく先は、まだ謎のまま。

## 前編

普段からあまり人気のない、王宮内でも奥まった場所にある庭園にて二人の男が言い争いをしていた。更に正確に言うならば、一人の男がもう一人の男に一方的に罵声を浴びせていた。

「お前、俺の地位でも欲しいの？」

相手から浴びせられる言葉に対して男は特に気にとめた素振りもなく、じつと黙ったままであったが、暫くして相手の言葉が途切れるその刹那を狙ってさくりとそう切り込んだ。その言葉にそれまで己の高ぶった感情のまま止め処なく言葉を連ねていた男は途端に口にすべき言葉を失い、きよきよと目を泳がせながらまるでその喉を絞められたが如く、呻き声にも似た、言葉ではない何かを口にしていた。

そんな相手の様子を見た男は徐に腰に下げた刀を地面に置くと、身に纏っていた見るからに立派な軍服をその場で脱ぎ捨ててしまった。軍服の下に着ていた白いシャツに黒のズボンという姿になった男は、軽く肩を回しながら器用に片手でシャツのボタンを上から一つ二つと外して首元を寛げると、一度深く息を吐いた。

「そんなに欲しいならこんなの今すぐお前にやるよ」

目を丸くさせたまま、未だにうまく状況を呑み込めていない相手に向かつて男はそう言うと、「じゃ、後はよろしく」と言って本当にそのまま刀と軍服を置いてその場を立ち去ろうとした。その姿を見てそれまで呆然と立ち尽くしていた男はやっと何とか声を絞り出し、

だんだんと遠ざかりつつある背中に向かって「お、おい！ お前、本気か？」と声を掛けた。

「……俺の今の立場は相応しくない。だからやめる。それだけだ」呼び掛けられた男はその足を止めたものの振り返ることはなく、背を向けたままそう言うとそのまま立ち去っていった。

\*\*\*

「陛下。中將殿が先程刀をお捨てになりました」

その言葉が発せられた瞬間、それまでずっと目の前の書類に向かって忙しなく動いていた目と手がびたりと止まった。

……またかよ、アイツ。前回から日があんまり経ってないっていうのに。

部屋の隅にて護衛らしく無表情かつ直立不動を保ったまま、俺は胸の内でこっそりと溜息をついた。中將が刀を捨てた。そうとなれば、その後の展開は簡単に予想できる。いや、これは既に何度も繰り返されたやり取りで、もはや予想とすら言えないかもしれない。

そんなことを考えていると、案の定「大将」と陛下が俺を呼ぶ声が聞こえた。俺がすぐさま陛下の執務机の正面に膝をつき頭を垂れて返事をする、陛下は一言「頼む」と俺に命じた。

「御意」

陛下の短い言葉の意味を正確に読み取り、俺はいつもと同じようにそう答えると、すぐさまその場を辞した。アイツの行き先なんて、一つしかない。俺は足早にその場所に向かった。

\*\*\*

「またそんな格好をして。一体どれほど陛下の手を煩わせていると思っっているの」

「だからさあ、俺あんな役職なんてやってられないんだって。じっとしてられない質なんだから」

先程から何やら話し声が聞こえてくると思っていたら、やはり思った通りそこに探し人である一人の男の姿があった。窓辺に腰掛け、片手で紅茶を飲みながら愚痴る男が居るのは所謂後宮と言われる場所である。そんな所に、陛下以外の男が存在するなどということはまずありえない。いや、ありえてはいけなはずである。

「なあ、どうやってたらあいつ失望させられるかな。やっぱり悪事の一つでもやらかすのが手っ取り早いのかな。でも俺あんまそういうのやる気しないんだよね」

「またそんな事を言って。どうして陛下の思いを汲み取ってくれないのかしら」

しかしながら当の男はというとまるで自分の家にもいるかのよう  
な気軽さで、何を気にするでもなく悠長に会話している。全くお前  
は一体何回言ったら分かるんだと口にしよつとした言葉は、けれど  
も次の瞬間に掻き消されてしまった。

「…………あのさ、普通そんな事言わないよ？ お前はあいつの正妃な  
んだから」

少しの間を置いた後で男は呆れたようにそう言うと、微かに口元を  
歪めるようにして笑った。そんな男の表情を見て、俺はまた胸の奥  
底で忘れかけていた何かがずくりとその存在を訴えてくるのが分か  
った。

こういう時ばかりは協力的な精霊に感謝しつつ（…………どうせ失敗  
するものと踏んで、落ち込む俺の姿を嘲笑うために協力しているの  
であろうが）、右手を前に出し目標を定めてため込んだ力を発しよ  
うとした時、案の定とも言つべきか、視界の中で目標たる男がひよ  
いとそれまでいた場所から姿を消したのが分かった。だが、俺の力  
量では今更目標地点を変更することは不可能だ。

力を発すると同時に先程まで男がいた場所が一瞬紅い光線に包まれ、  
魔術自体は恐らく成功したことが分かった。だがいくら魔術が成功  
しても、その場に誰もいないんじゃ何の意味もない。

「…………お前、この野郎。俺の体力を無駄にしやがって」

あまりの疲労感に思わず両膝のあたりを掴むようにして手をつき俯  
いた。すぐ傍から聞こえるゲラゲラと笑う声に苛々しながらも、た

つた一度の魔術行使で言葉を発することさえ難しいほど息が上がってしまっ己の非力さに自分でも呆れてしまっ。

これまで攻撃系の魔術についてかなりの鍛練を積んできたが、その努力は依然として一向に実を結ぶ気配がない。一方で防御系の魔術はというと確かに攻撃系の魔術に比べれば遥かに上手く扱っことが出来るものの、それはあくまで精霊の協力があつてこそ話である。俺の場合そもそもこの精霊の協力を得られることが非常に稀なため、俺の魔術の腕前は言わずと知れたものだろう。

「だつてなんか直撃したら凄そうだったじゃん。俺も人間だからあんまし痛い目遭いたくないし」

その楽しげな声に顔だけ上げて見ると、まるで何事もなかつたかのようにして男は元の位置に戻つていた。足をふらふらと遊ばせながら笑みを浮かべる男の姿を見て、またより一層疲れが出たような気分になつた。

「あーあ。また失敗かよ……」

「まあそう落ち込むな、エンチェス。お前の体力なら俺が責任持つて回復させてやるから。な？」

「俺を思ふなら脱走の頻度上げるんじゃないやねえよ。……疲れるんだよ、阿呆」

何となくその場の流れで思いついた自分の言葉について、実際に口にしてしまつた直後にハツとし、さり気なく言葉を付け加えた。

「ほらほら真剣に受け取りなさいよ。目の前でこんなにもエンチェス様は疲労していらっしやるんだから。他でもない貴方の行動によつて、ね」

俺を弁護するかのように引き続き彼女が発した言葉に、男は態とらしく目を細めて俺を見た。

「真剣に、ねえ……」

そんな呟きが聞こえてから暫くして、男は大きな溜息を吐くと徐に窓際から下りて俺の方へと近づいてきた。そして俺のすぐ目の前でやって来ると、そのまま片手を俺の額の前にかざした。体力回復のための魔術だ。

もう一体何度、同じことを繰り返してきたことだろう。コイツが逃げて、それを俺が追いかけて。そうして見つけたコイツに向かって術を放って、失敗して。疲労困憊した俺が文句を言い、彼女もまたコイツを咎めて。それを聞いているんだか聞いていないんだか分からないような顔をした後、徐に俺に回復魔術をかけると、結局コイツはいつも同じようなことを言うのだ。

「分かった、帰るよ。お前が哀れだから」

すなわち、逃げ出して来たばかりのその場所に戻る、と。

「もう、なんてことを言うのよ。毎回毎回大将ともあろう方にこんなにも迷惑をお掛けしているというのに」

「はいはい、申し訳ないですよ」

彼女がその眉をつり上げながら自分に向かって話すのを男は言葉では軽く流していたが、その横顔が俺には微かに微笑んでいるように



見えた。

## 中編

俺の家は貧しいにもかかわらず子供ばかりが多く、日々の生活はなかなか厳しいものだった。口減らしのためにどこか山奥に子供を捨てることも然程珍しいことではなかったのに、俺の親はよくも全員を育て上げようとしたものだと思う。

長男であつた俺は早々にそういった事情を把握し、ある日近くの森で拾つたナイフと僅かな食糧を持って家を飛び出した。家族のためとかそういった理由からではなくて、ただ単に嫌になつたのだ。毎日たくさん働かなければならないこと。腹いっぱいご飯を食べられないこと。更に長男である俺は何かと下の兄弟たちの面倒を見てやらなければならないこと。そういったことが全て煩わしくなり、そんな場所から単に逃げ出したかった。

世界のことどころか世の中の一般常識すらほとんど何も知らない。ただのガキであつた俺が旅の途中で死にそうになつたことは、もう数え切れないほどあつた。本当によく生き延びたものだ。恐らくはほんの少しばかり、周囲の人間よりも運が良かったのだろう。

家を飛び出してから数年が経ち、流れの用心棒として時に仕事を請け負いながら各地を転々とする中で、次第に名が知れるようになって頃。ある時、馴染みの仲介人を通じてリンロート国第二王女の護衛の依頼があり、そしてそこで初めてセイと出会つた。

第一印象はいかにも軽薄そうなただの遊び人としか感じられなかったが、仕事を通じて共に日々を過ごすうちにその印象は大きく変わっていった。セイは始終気を抜いているようでいて実のところは常に周囲に目を配っており、異変にいち早く気づくのはいつも彼だったと言っても過言じゃない。けれどもそれはどれもさり気なさ過ぎて、この事実気付いている者はあまりいなかった。

もう一つ俺が気づいたのは、セイがどうやら王女と知り合いであるということだった。しかもかなり親しい関係であるようで、あまり人目のない時には彼はかなり気安い口調で王女に話しかけていた。その時の彼の表情は普段とはやや異なるものであり、俺には彼がまるで王女に恋をしているかのように見えた。

もし万一それが真実だとすれば、彼は今どんな気持ちでここにいるのだろう。彼女はこれから国王陛下の正妃となるためにイルクという国に向かっており、彼はその護衛をしているのだ。そんな考えが浮かぶ度に俺はその思考を打ち切った。いくら何でもこれは穿ち過ぎだろう、と。

\*\*\*

「なあ、エンチエス。お前は何で旅をしてるんだ？」

いつの時だったか、旅の道中でセイが不意に尋ねてきたことがあった。

「……さあな。ただ強いて言うなら生きるため、か？ 俺は貧乏な上に子沢山の家生まれだからな。今更帰る場所もないんだ」

「ふーん」

「セイは？」

「俺も特に理由はないなあ。ただ俺って同じ場所に長く居られない質なんだよな」

いかにもセイらしい答えだと、その時の俺は特に疑問を持つことなく納得した。

\*\*\*

約2カ月にも及ぶ長い旅路を経て無事にイルクの都に到着し、王女から後払い分の報酬を受け取った後、城門を前にその場を後にしようとしていたところ、城門の前に立っていた兵士から「護衛の者たちも中に入るようにと陛下が仰せで御座います」と呼び止められた。そうは言ってもこの場限りの雇われの身である俺たちには関係のない話だろうと、気にせずセイと共にそのまま歩きだしたところ、「お待ち下さい！」という焦ったような声と同時にどういうわけかこれまで旅を共にしてきた十数人のリンロート国の兵士たちに囲まれてしまった。

突然のことに困惑し思わず隣にいるセイを見るが、セイも想定していなかった事態であったのか周囲を鋭く見渡しながら何かを思案しているようであった。しかし暫くして一つ深い溜息を吐くと、「連

れてくならさつさと連れてけよ。どうせ俺たちに選択肢なんてないんだろ？」と普段のセイらしからぬ荒っぽい口調で言った。

「胸糞悪い」

不意に耳元でそんな呟きが聞こえたかと思うと、セイが俺のすぐ横を通り過ぎて行き、周囲が戸惑う中、一人ずかずかと城門の中へと入って行った。

セイと共に城門の中に入り案内された先にいたのは、金色に輝く王座に悠然と座るイルクの国王陛下その人であった。イルクの国王陛下は全く以て噂に違わぬ容貌をしていた。“国のすべてを支配し、何人たりとも寄せ付けない孤高の絶対者”。まさか彼と直接会うことになるとは夢にも思わなかった。

「久しぶりだな。セイ」

「……相変わらず随分と回りくどいことをするんだな。先に言ってくけど俺、こんなところに長居する気ないから。さつさと用件を言ってくるんない？」

出会って早々、親しげに声を掛けてきた国王に対して、セイは思わず俺が驚くほど鋭い口調で口早に言葉を返した。この場にもし他の人間がいたならばまず間違いない。「この無礼者！」などと言われた後、不敬罪であるとして即座にその身を拘束されたであろう。ところが国王はそんなセイの言葉に眉を寄せるところか、「お前は相変わらずだな」とどこか楽しげにその口元を緩めた。

それにしてもリンロート国第二王女に続き、イルク国国王陛下とも面識があるとは。しかもこれまた良くも悪くも浅からぬ仲であるように見える。本当にセイは一体何者なのだろうか。

「エンチエス・ナロイ。セイ・ラナス」

完全に己を第三者であると捉え、セイと国王のやり取りを視界に入れつつも密かに内心であれやこれやと考えを巡らせていたところ、突如呼ばれた自分の名前に再び現実へと意識を向けた。

「お前たちをこの国の大将並びに中將に任じる」

続けて国王の口から発せられたその言葉は、けれどもまるで現実の出来事ではないような、妙な浮遊感とともに俺の耳に入り込んできた。

\*\*\*

大将という地位に就いてからしばらく経った、とある日のこと。その日もいつものようにセイを探しに行くように命じられ、まっすぐに後宮へと向かった。ところがどこを探してもセイの姿が見つからず、途方に暮れていると「森の方から匂いがする」とすぐ傍で囁く声が聞こえたため、精霊に導かれるままに近くの森へ向かうと、間もなくセイの姿が見つかった。

鬱蒼と生い茂った一本の大木の下でセイは両足を投げ出すようにして座り込んでいて、そのセイに何者かが覆い被さっているのが遠くからでも分かった。そこで俺は相手に気づかれないうちにゆっくりと距離を縮めていった。ところが漸く二人の姿がはっきりと見えるような距離まで近づいた時、「止まれ、エンチエス」と低く鋭い響きを持ちながらも聞き慣れたその声に、思わずぴたりと動きを止めてしまった。

「そのまま後ろを向いて3秒数えろ」

続く声に自分でも無意識の内に体は従っていて、気づけば俺はその場で後ろを向いていた。

心の中で3秒数え終わると同時にカシャンツと刀が鞘に収まる音がして、すぐさま俺はその音がする方に向き直った。驚いたことにそこには気だるげな様子で額の辺りを片手で押さえるセイがいるのみで、先程までセイに覆い被さっていた何者かの姿が消えていた。

「……悪い。もう少しだけ待ってくんない？」

セイは薄目で俺を見ながら小声でそう言うと、こちらの返事を待たずして素早く目を閉じてしまった。いつになく疲れ切ったその表情を見て、わざわざ起こすような真似も出来ず、俺はセイの言葉に従うべく彼の隣に腰を下ろすと徐に目を閉じた。

中将殿はもしかするとかの“夜明けの神”と呼ばれる男  
なのではないか、という噂がある。

ぼんやりと夢と現の狭間に意識を漂わせていると、ふと以前、再会  
した際の二男の言葉が脳裏に浮かんだ。

大将という地位に就いて間もない頃。セイを探していた時、偶然  
にも城内の渡り廊下にて再会した二男は、幼い頃の無愛想はどこへ  
やらといったような愛想の振りまきようで、そのあまりの違和感に  
つい「何か気持ち悪くなつたな」とぼそりと呟くと、それを聞き逃  
さなかつた二男によつて近くの物陰に連れ込まれ、「このクソつた  
れが！ よくも一人で逃げ出しやがつたな！」と一切の容赦なく首  
を締め上げられた。

思えば幼い頃の二男は始終無口にして無愛想で、とにかくどこへ行  
くにも俺の後をついて回っていた。そんな彼が、勝手に逃げ出した  
長男に次ぐ二男としてあの家でやっていくのはなかなか大変であつ  
たのだらうなと思ひ、やや意識が遠のきつつも何とか手を伸ばして、  
よしよしとその頭を撫でてやった。

暫くして多少は気が済んだ様子の二男は俺を解放すると、唐突に  
「エンは多分、随分と厄介なことに巻きこまれてる」と真剣な顔を  
して俺にそう告げた。そのまままた何かを話し出そうとする二男の  
口を俺は咄嗟に手で塞ぐと、精霊に頼んで俺と二男のいる空間に防  
音の魔術を行使した。



「馬鹿。どこで誰が聞いてるか分からないだろうが」

「エン。エンは知ってるか？ あの中將殿がかの“夜明けの神”ではないかという噂」

魔術が成功したことを確認した後で手を離すと、俺の言葉を無視して二男は口早にそう尋ねてきた。

「……“夜明けの神”？ 世界のあらゆる戦場に突如として現れ、たった一人でその戦局を一転させるほどの力を持つってという男の正体がセイだって？」

先の全く見えない暗闇を照らし出す一筋の光のようにその人物は現れ、絶望に満ちた長い夜を一瞬にして消し去り、誰もが待ち望んだ夜明けの日を連れて来る。それはまるで夜明けを司る神のように、とどこかの吟遊詩人がそんな風に歌ったことから、彼は“夜明けの神”と呼ばれている。彼は神出鬼没につき、実に様々な場所に現れるそうだが、不思議なことに誰一人として彼の容貌どころかその声すら覚えていないという。

「なんでも陛下は以前からその“夜明けの神”に対してかなり強い関心を抱いていたそうだ。……陛下の中將殿への対応は正直、かなり異様だろ？」

「まあ、確かにそうかもしれんが」

そうやって俺が全面的な賛同を避けるような曖昧な返事を返すと、二男は先程よりも強い口調で更に続けた。

「陛下は基本的に『去るもの追わず』。それをよりにもよって大將に連れ戻させるなんてありえないんだ。大將つてのは言わば陛下の

私軍総帥同然なんだぞ？　いかに中将殿と言えどエンの方が上なんだぞ？」

ちゃんと分かっているのか。いや分かっているまいだろう、とでも言わんばかりに二男は言葉を畳み掛けてきた。しかしながら、これでも一応は自分の地位とやらをきちんと認識しているつもりだ。陛下の私軍に属し、更に特権的な地位である大将、中将、少将という3つの地位のなかの最高位に俺は今、就いている。

「……正直話を聞く限り、エンは体の良い中将殿の監視役みたいだ」  
二男はそう言ってその唇を噛みしめると、それきり口を噤んでしまった。けれども俺に向けてくるその目ははつきりと不安だ、と訴えていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0022y/>

---

The Chains

2011年11月2日06時09分発行